

飾る一代の巨擘が代表作と推すに躊躇しない。左隻にあつては紅梅の根本から派生する伸びやかな一枝は、よく彎曲せる巨幹を支ふるに足る力を見せ、右隻にあつては、白梅の梢頭斜に天を指す一枝は、恰かも臥龍の頭を昂げて雲を望むにも似た勢を示す。かくの如き嫩枝の快き張りを持つ描線と、流麗にして些かも澁滞の痕を見せぬ水文の描線とは、彼の畫技が天賦の才に加ふるに、正確な漢畫の素養と、撓まざる寫生の修練とによる事の大なるものがあるのを如實に物語つてゐると云へやう。

水流の部分を除いた地には金箔を置き、梅樹の枝幹は墨の沒骨描に白緑のたらし込を用ひ、苔斑は綠青の上に墨點或は胡粉點を打ち、梅花は濃き朱白の沒骨描の上に金泥を以て蕊を描く。流水は地に銀箔を置き、渦文を鉄糊、膠、或は礬水の如き類を以て描き、後硫黄によつて地の銀を燻したものかと想像せられるが、或は何か光琳獨特の技法に出るものであるかも知れない。若し前記の如き手法によつたものとすれば、製作當初は黝黒の水流の表に銀色の渦文が鮮かに映發してゐたものであらうと思はれるのであつて、その手法は水の量感と流動感とを表現するのに甚だ効果あるものであり、燦爛たる金色と、寂びのある黝黒と、その上に浮き出た銀色との諧調は、豪華の中にも澁味を含んだ洵に心にくきものであつたであらう。但し今日では渦文の部分は何等銀色を認めず、黄褐色を呈し、極小部分には銀泥かと思はるゝ輝きをもつものが残存してゐるやうに見える。春山武松氏に従へばこの特殊な技法を説明すべき資料が現今小西家に傳はる光琳關係資料中に存する由であるが、(世界美術全集第二十三卷参照)余は不幸にして未だ小西家文書を精査する機會を得てゐない。之を要するにこの技法の説明には尙研究に値ひすべきものが多々あると云はねばならぬ。

本圖左隻には青々光琳、右隻には法橋光琳と款し、共に方祝の圓印を捺す。方祝圓印を有するものは、他に伯爵徳川達道氏藏風神雷神圖屏風を擧ぐる事が出来るが、本圖の方祝印と風神雷神圖のそれとは大さその他に於て甚だ相似てしかも全く別印であり、今日小西家に傳へる所の方祝印は風神雷神圖のそれに

近きものである。但し小西家に傳はる所謂光琳の印章、及この方祝印に就いては尙考ふべき問題があり、今日では早急の論斷を避け、本圖の正確なる落款印章の印影を掲載して事實を記述し、資料を提供するに止める。

落款は濃墨にして稍長鋒の筆を用ひたるものゝ如く、根津家藏燕子花圖屏風落款の豐潤なるに比し些か瘦羸の感あり、國家藏躑躅圖落款の輕快なるに比しては稍遲澁の感を伴ひ、光琳落款中上乘無比なるものとは言ひ難い。

然しながら本圖の如き、意匠筆致共に卓拔、眞に瞠目に値する傑作にして蓋し光琳畫研究の一標準たるを得るものであらう。因に本圖は本年一月國寶に指定せられた。(正本)

七、圓山應舉筆 昆蟲寫生冊 東京 帝室博物館藏

帖裝 紙本着色 一圖 一・五種 横一二種

近世畫史を顧みて、元祿享保以後に於ける狩野、土佐の流を汲む畫師の殆んどすべては、古人の所謂神韻を形似の外に求め、徒に傳來の摹本を倣へば、畫事の目的は盡きるものと構へて居つたのであるが、ひと度應舉が同じく狩野派の石田幽汀の門より出て、前蹟摸索の積弊を矯めて、専ら應物隨類の寫生に依

第一圖 屏 書 (原 寸)

つて圓山の一派を樹立し當時沈澱しきつた畫壇の面目を一新したことは人みな
の知るところである。

今收むる所の昆蟲冊の如きは、應舉がいか自然物象の寫生に精勵したかを
窺ひ知るに最も好適な資料であらう。帖の表紙に「源應舉昆蟲寫生冊」とあり、
中に紙類大小五十九紙を貼付し、之に各種昆蟲の類が或は數種の顔料、或は單
に淡墨のみを用ひてと
りくに寫生してある。

その中、二十四紙は豎
一一五・糲、横一二糲
の大きさの礬水を引いた
鳥の子風の紙質であり、
之を帖の臺紙に二枚宛
繼合せて貼り、直接に
圖畫せるものとその一
部に別紙を貼りて圖せ
るものと全く別紙に圖
したものを之に貼付せ
るものと混じてゐる。
その外に紙質も大きさも
一定せざる斷片紙が取
混せて貼付されてある。

帖のはじめの一紙に

「安永丙申仲秋初寫、

蟲、應舉藏」(第一圖)とある。安永五丙申は應舉の四十四歳の時で、彼が三井
寺圓滿院門主祐常法親王に仕へて元明の諸畫蹟を參看する機を得、刻苦畫筆を
練磨した時期に次いで、彼の畫技の漸く圓熟の境に入つた頃に相當するもので、
斯く平生觸目の物象を捉へて丹念に寫生してゐることが彼の日常修養の程も窺

はれて興味深いものがある。

茲に收載の一圖をとつてみるに、秋啼く蟲の數種を捉へて、之を細心精緻に
觀察し、或ものは黃土、綠青、岱赭、朱等の顔料を筆に含ませて一氣呵成に沒
骨體にて肢體の狀を圖し、或ものは淡墨を細筆に乗せてその翅の條を細密に寫
してゐる。圖には一々蟲名を記し、彩色の覺書を入れてゐる外に、「誤テ下長

(原寸)

シ」などと留書して飽く
まで精密描寫の實を舉げ
んと苦心せる跡が讀まれ
る。斯の如く鉤勒、沒骨
の手法を併用してよくそ
の生物躍動のさまを手
取る如くに寫し出す巨匠
の筆端の妙は更に多く加
ふべき言を知らない。

圖 蟬 第二圖

因に帝室博物館にはこ
の昆蟲寫生冊の外に、花
卉禽鳥冊と蝶の冊と渡邊
始興の禽鳥寫生圖を應舉
が臨寫したと傳へる冊と
が一括されて、應舉寫生
帖四冊として收藏されて
居るが、この昆蟲寫生冊
に比して他の三冊は著し

く生彩を缺くところがある。而して特に奇異に思はるゝは圓山派畫集收錄、西
村總左衛門氏所藏の應舉寫生帖中の數圖は博物館本の花卉禽鳥冊中の各圖と全
く同一にして唯異なるは前者が書畫共に格段の生彩を有することである。應舉
果して同一寫生帖を二本作成したのであらうか。(菅沼)